おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成17年
7月号

毎月23日発行
通巻419号
（題字　矢追日聖）

★発行日　平成17年7月23日
★発行所　大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷　大倭印刷株式会社
★定価　1部　250円
年間購読料3,000円（送料共）
★振替口座　01050-6-67002
大倭出版局
URL http://www.ohyamato.jp

大倭鏡池の青鷺　　矢追房子さん撮影

平成元年８月10日　大倭安宿苑職員研修会にて

「お　盆」によせて（上）

社会福祉法人理事長として　　　法主　矢追日聖

証明しにくい話

今日は八月だから、ひとつお盆について話して下さいということやけども、私の話はもう雑談だと思って聞いてもらったらいいと思います。五目飯みたいなもので色々なものが中に入っているから、その中で自分が一番気持ちにぴったりくるようなところだけを捉えてもらったらそれでええ。もう他は忘れてもらってもかまへん。（笑）

最近テレビでも、霊魂とか霊界とか心霊実験とかよく放映しています。視聴率のあるところを見ると、世間の人はそんなことに関心があるんやな。よく分からないけど何かあるやろというような、世間一般の人がその程度の認識を持ってるんですね。また本屋へ行ったかて心霊関係とか霊魂とかの本が一つのコーナーとしてたくさん並んでいる時代です。こんなもの流行っとるんやなと思う。

というたかて頭の毛が黒いとか白いとかいう問題やったらお互いにすぐに理解できるけれども、霊界とか霊魂とかになってくると訳が分からんわね。想像もできないし掴むこともできない、出してきて証明することもできないからね。興味があるというだけであって、本読んだかて話を聞いたかてなかなか分かるものと違います。

この頃、金縛りにあったという若い女の子が多くいます。それはあんた達の中でも経験あるかもしらん。うちの三枝（さいぐさ）寮

（※職員寮）の寮母さんでも何かおかしな足音聞こえるとか言うたりね、何かの現象があったら、これはひとつの霊魂とちがうんやろかとか、そんなふうに興味を持つわけや。分からんから興味を持つのであって、分かってるものやったら別に何にも興味はないんやけどね。

大体お盆になってくると、テレビでも霊魂やとかお化けやとか、そんなドラマが出てくるわ。だからまあ今日もそんな意味でお話するけど、別に信じても信じてくれなくてもええんやで。あぁ理事長さん、あんなこと言うてはったなと話として聞いておいてもらったら、それでええねん。

いわゆる現象として科学的に裏付けのあるもの、例えば医学的に細胞を顕微鏡で見て、あんたここに癌があるよと言われたらこれは信じたらいいんですよ。ところが霊界の話には裏付けは何もない。けれども一応、聞いておいたらええ。裏付けがなくてもお互い自分で経験した人は信じることができるんです。

あんた達も肉体以外に、心の働きとか思惑とかこれはもう皆共通に持っているんやから、心があるということは信じるやろ？ それじゃお前の心を一ぺんここに出して科学的に証明せいと言われても証明できないけれど、日日（にちにち）同じ職場で仕事しておれば、その人間のやることを見て、あの人は親切やなあとか、いけずやなあとか（笑）、気が短いなあとか、心というのは分かる。行いを見ていて分かっても、心を引っ張り出して説明することはできへん。けれど、お互い心を持っているということは皆認めるわね。

八月というのは昔から大体お化けの話や幽霊の話が多いわけや。我々子どもの時代には各家庭の中で、人が集ったら、向こうの山の中からお化けが出てきたやとか、あそこ行ったら砂かけ坊主が出てきて砂かけられた、誰々さんはどこの河原で狐に騙されたとかね、どこかにご馳走持って行ったら空っぽでなかったとか、そういうような話題が出たんです。

田舎というのは、風呂でも回り持ちやったんやな。井戸の水を入れてマキで焚くんやから、毎晩は焚かへん。そやから近所の人が替わり合うて、今日はウチに風呂に来てくれと言う。誰かが入って、後の者が待ってる時に、そういう話がわじゃわじゃと出てくる。我々の子どもの時代には田舎はそんなんやった。大体農村やからね。今、子どもは漫画やテレビを一所懸命見とるし、親は親で何かやってるし、家族が寄って話をするような機会が少なくなってきた。それだけに昔の言い伝えも消えてるけどね。

それでも今の時代にも、例えば『四谷怪談』みたいな映画を夏になったらやってるがな。そうすれば、幽霊はやっぱりあるのやろかなあと、信じなくても思うわな。霊界の話でも、分からんけど何かあるのとちがうか、死んだらそんな世界あるのかもしれんというような気を持つわな。

霊界では人生の決算をする

私はこの年まで色々経験して、私の世界には霊界というものはあります。あんた達の世界に、あってもなくてもかまわないんですよ。いずれ死んだら分かることです。けれども死んだ時に、もし霊界があったらどうするかという不安はあるかもしれんわな。（笑）

霊界というのはまあ大体で言えば、自分が生きてきた一生の間にやった色んなことの決算をやるんです。その功罪の計算をしてみて、功績の方が多かったら死んだ世界は良うなるし、マイナスが多かったら苦しむんやね。そんなことは言えると思うんです。

施設で亡くなって大倭で葬式することがあれば、私は家におる限りはお通夜に行っています。すると、その亡くなった人の霊界の状態が分かるんです。仏教では十の解釈、一から十までの階級があると仮定してるんやね（※十界＝地獄界　餓鬼界　畜生界　修羅界　人間界　天上界　声聞界　縁覚界　菩薩界　仏界）。その、どの辺の段階におるのかということを死んだ人に対して見るんやな。まあ大体二〜三、四というところが多い。これはもう平凡な人生を送った人。けれども五か六、七の高位になってきたら、なかなかそんな人はおりません。だから霊の世界に入っても自分のことが自分で処理できない人が多いわけや。

例えば、死んで一緒になろうと心中する人おるけどな、死んだ世界では絶対一緒になれへんよ。もう死んだとたんに二人はパーッと離れてしまう。

それは電気で説明したらよく分かるんや。テレビという機械があったら、電波のチャンネルを合わせるとそこの局の映像が出てくるわな。人間の場合でも、あんた達の考える能力もエネルギーやからね、電波と一緒で、皆ひとつの波長というのがあるんです。自分から出ている霊魂の波長があります。霊波長と言うんやな。霊の世界は、霊波長で動きます。

だから同じ波長の者同士は接触できるけれども、違う波長の者はあかんねん。仮に、心中した一方の波長が三であって、もう一方が四であったら、二人しっかり結び合って死んだかてね、全然会われへんの。そうすると孤独になってしまうねん。

心が全く同じという人はおるやろか。ここに二人おったらもう違うでしょ。三人おったら三人とも違う。どっかで皆違っている。霊の働き、波長

が違っているんやから。

だから死んだ世界というのは大体、六～七から下の人であれば孤独ですよ。けれども九とか十とかそのくらいの上位の人になっておれば、自分の霊波長を自分でコントロールできるから、好きな人とも会おうと思ったら会えるし、誰かに霊界に出て来いと言ったら出て来る。これは皆波長で呼ぶんや。けど私が見て、そこまで行ってる人は少ないですよ。普通は五までの人が大多数。だから霊界は、そんなにぎやかな所と違います。孤独やで。友達も誰もおらへん、たった自分一人や。

生きている間の自分の心の状態によって自分で苦しむのやな。例えば死ぬ時に、ワシはあれだけ一所懸命働いて畑や山やお金を残した、死んでしまったら誰か取るやろうなと、この世にそういう欲な思いを残して死んだら、それが自分の心の重荷になって苦しめられる。

死んだ世界で気が付いて、そういうような心を自分で直そうと思ったかて、自分の力だけではどうにもできんのや。生きてる人の力を借りて、直してもらわないといけない。皆さん、先祖さん供養をするでしょ、それが力になっていくんです。供養することによって霊の世界の人が何とか救われていくようになっているんです。

お盆の起こり

お盆というのは仏教の行事です。元は「盂蘭盆（うらぼん）」というインドの言葉で、一番苦しい状態のことです。両足を紐で括って逆さまに吊るすと、血が下がってきて死んでしまう、死刑やね。首をポーンと切られる死刑やったら瞬間やけどもね、両足括って死んでいくんやから、それは一番苦しいやろね。その苦しみのことを〝盂蘭盆〟と言うんです。

中国から日本に渡ってきた「盂蘭盆経」というお経があります。その中に親孝行の話が書いてあるんです。お釈迦さんの弟子に、目連尊者という偉いお坊さんがおって、その人が自分の死んだお母さんを見た時に、地獄の餓鬼道に落ちているんや――まあ地獄があるかないか知らんけども、話やからね、聞いといて下さい。お母さんがご飯食べようと思ったかて、ご飯から黄や青の炎が出てきて食べられへん。手も足も骨と皮で、腹ばっかり膨れてる。そんなん餓鬼草紙の絵本で見たことあるでしょ。

目連尊者はびっくりして、どうしたら救うことができるかと、お釈迦さんに質問したんやね。その時、お釈迦さんの言わはるには、「執着心の強い心で生きていたから、死んだ時に餓鬼道に落ちて、いくら食べたいと思っても食べることが出来ないのだ」と。お母さんは生きてる時に人に施しを全然しなかった。一つ物をやるのでも惜しい、欲張りだったらしい。そして目連尊者に対してね、「托鉢しているお坊さんにお供養しなさい」と言うねん。お釈迦さんの時代やから今から三千年前の話や、お坊さんでも何千人とおるらしいねんけど、その全部にやで。

七月十五日は、インドのお坊さん達が何か行（ぎょう）をする日だったらしい。その時に供養すると、お母さんが助かると言うわけや。それで助かったかどうかははっきり書いてないけどね（笑）。まあ、救われたんやないかと思う。

そういうような物語から、日本でもこのお盆というのが流行ってきたんや。

それで今、「新盆」とか「旧盆」とか言うでしょ。日本が今は太陽暦に変わっているから、関東地方は大体、新暦で七月十五日のお盆なんです。関西は一ヶ月遅れの八月十五日で、これが旧盆。

だから両方にまたがる先祖さんは、お盆も忙しいわ（笑）。関西の方は農耕中心やから、八月十五日頃は稲も大きくなってるし、水を見て回って草さえなかったら仕事がない。昔から「八月大名」言うて、一番農家の暇な時やから都合がええねん。人間って勝手なもんや。

お盆には先祖さんが皆自分の家に帰って来はることになってるんやな。十三日の夕方になったら蓮の葉の中に、色々お供え載せてね、提灯に火をつけて、川の所まで迎えに行く。霊界は真っ暗だから、灯りを持って行かないと道を間違うと言うんやけど、霊界を見てもそんな暗がり何にもあらへん。そんなアホのことないねんけど、まあ、ひとつの行事やから。それでお盆の間は、「殺生したらアカン、逃がして来い」と言われて、キリギリスとか飼ってたかて私、逃がしましたよ。それからまた、餓鬼も皆帰って来るから足引っ張られて死ぬでぇとか病気になるでぇとか色々注意されました。

ほんまは遠くから来るというわけでないんやけれどもね。お盆とかそういう行事の時には、こちらの人間の世界から先祖さんを呼ぶ心を持っているから、因縁に依って帰って来るわけや。先祖さんでも仏になってる人ばかりやったらよろしいがな。けど、いろんな苦しみを持って霊界におる人もいるからね。八月のお盆頃には皆よう病気になるわ。

肉体のない、心だけの世界

けれども普段から、自分の先祖さんは自分の肉体に宿っておるんですよ。肉体と言うと物質的やけれども、自分の肉体の中の一つ一つの細胞が皆、先祖さんの細胞の続きやから、何億の細胞の中に、皆、先祖さんの心がある。お盆になったら他所か

ら帰って来るのと違うんですよ。本当は先祖さんは、いつでも自分の家に居るんです。どこへも行ってへん。皆さんの肉体の中に居ると考えたら一番間違いない。

けれども仏教では切り離して説明してるんですね。坊さんに葬式で拝んでもらった時は、ご本尊の阿弥陀如来さんがいてはる西方十万億土に行って、そこは浄土やから喜んで生活しているはずなんです。ところが、お盆になったらそういう先祖さんをつかまえて今度は全部、餓鬼扱いをして供養するのがお盆の行事なんです。だから矛盾した話やねんけれども、坊さんは、そう言わんかったら商売にならへん。(笑)

そうやとしてもね、お盆はお盆として、ひとつの行事としてすればいいんですよ。

私なりに霊界を見てますけど、別にお盆やからと言うて特別にせんでも、毎日、自分の仏壇の所でお茶でもご飯でもお神酒でも供えて、生きてる人と同じようにしていたら、それでいいんです。

先祖さんは、言い換えたら肉体を持たない人間やからね。心だけの世界だから、量や数は要りません、ごはん一粒でもいい。そうすると霊界の人はそれで満足してお腹が一杯になるんですね。心だけの人間やけれども、やっぱり形のものを供えてやらないと満足しない。

今日はありがとうございましたと頭下げて口だけで礼言うてお終いというよりも、金一封包んでありがとうございましたと持って行ってみぃ、その人の心が喜んでいるなと、形を通して分かるわな(笑)。心、心と言うだけでは物事は通用しない。やっぱり人間には、心と肉体と両方があるんやから、自分の心を表そうと思うと、ある程度、形のものを通して表さないといけない。

だから先祖さんに対しても、供養する時は何かお供えして、どうぞと形を通して拝むと相手に通じるんやな。ただ心だけというのではあかん。

（続く）

風ぐるま

かあさんとわたし

大阪府豊中市　森　脇　聖　淳

平成十七年四月十九日、ヱイちゃん叔母ちゃんこと矢追鈴月かあさん（※元の名が中村ヱイさん）が亡くなられて早四年が経ちました。今も命日には、大倭の方々がお参りして頂いていることを知り、甥として感謝の念で一杯です。

昨年還暦を迎え、六十の手習いにパソコンを買いました。法主さん、かあさんがお亡くなりになり、大倭との交流も薄らぎかけていましたが、大倭会文化行事の世話役である湯浅芳郎氏とのメール交換により、今まで以上のお付き合いをさせて頂くようになりました。

平成5年 池田市での個展の折に
筆者、法主さん、かあさん、平谷照子さん

かあさんは六男五女の四女として、和歌山県有田で生を受けました。私の母は長女、かあさんは母の妹にあたります。

私が小さい頃、かあさんは白い衣装をまとい、タバコをくわえ、時々我が家に来られていました。

『釈迦説法図』平成11年作

チョット不気味な感じをしたのを、幼ごころに覚えています。

小学生の時、母に連れられて大倭に行きました。紐を持った女性が私に近づき、何やら訴えていました。後でわかったことですが、「紐で手を縛ってくれ」と言っていたらしいのです。ここでも気持ちの悪さを感じました。

法主さんの帰幽祭に大倭に出向きました。遠くの方で喚く声がしました。昇ちゃんでした。その時は昇ちゃんが大倭のマスコットボーイとは私は知りませんでした。拝殿で昇ちゃんに胸ぐらを捕まれ、温かい?おもてなしを受けました。

このようにして、私と大倭とは不気味な関係でいます。

長い人生の間に一度や二度は死ぬような目に会うことは稀ではない。が、馬鹿正直にも三度も、そのような体験をしてしまいました。

一度は小学一年生の時、生まれ育った和歌山は紀ノ川で、流れに足を取られ溺れました。その時は、「もうあかん」と思いました。数秒間に過去の出来事が現れ、あの世も見せてもらいました。それ以来、変な能力が開発され、ほんの僅かであるが予知、透視が備わるようになりました。

二度目は自転車に乗ってタクシーにぶち当てら

れました。ルンルン気分でペダルをこいでいたら、自転車の真横に車が突っ込んできました。十メートルほど跳ね飛ばされ、あーこの世の終わりかと思いしや、かすり傷ですみました。この事故以来、私の予知能力は、幸か不幸か無くなりました。

　三度目は大学の時、バイト先の風呂でイイ湯だなと鼻歌まじりで湯ぶねにつかっていた。ジャージャーと湯が溢れているのにも気がつかず……その結果、ガスの種火が消えて中毒になり意識不明。この時も坊さんのお世話になりかけました。

　四十歳、人一倍働きました（つもり）。その結果、体調を崩し、このままでは命にかかわると思い、長年勤めた会社を辞めました。

　退社と同時に身体は元気印。海外旅行や各種会合に参加。自己投資しながら、ネットワーク作りをしてまいりました。

　四国小豆島でのセミナーに参加して、弘法大師空海との出逢いがあり、「貧しい人を救済せよ」とのお言葉。それまで神社仏閣なんて興味なし、まして神、仏に手を合わせるなんて！　常に己の力のみを信じて生きてきた四十年、神頼みなんてまっぴら人間な私でした。

　空海との出逢いにより、仏門（真言宗善通寺派）に入り修行させてもらいました。ある日のこと、会合でI画伯にお逢いすることが出来、絵の世界を尋ねました。すると先生は、「これから先、絵を描きたければ、三年間、絵とかけ離れた仕事をしなさい。そこでなお、絵の世界に従事したければ、絵の道に進めば」とのこと。

　便利屋を開設したり、イベントのプロデュースをしたり、いろいろ経験させてもらいました。

　その結果、小さい頃からの夢であった絵を描くこと、対象は仏様、これなら描く人も少なく、なんとか飯を食わせてもらえるだろう?と考え、仏画の世界に入りました。不動明王、観音さん等数枚描かせてもらいました。

　究極の仏画は平成元年に、『両界曼荼羅絵』胎蔵界四百十四尊、金剛界千四百六十一尊、合計千八百七十五尊を描くことにチャレンジしました。朝の水行に始まり、ご真言を唱え、ひたすら描き続けました。半年後、やっと完成しました。

　そんなことで仏画の世界に入り、早々に『両界曼荼羅絵』を描き上げたことに、マスコミ関係者は注目してくださいました。

　今も多くの方々にお世話になりながら、仏画の世界に身をおかさせて頂いています。有難いことです。日々感謝しております。

　実は私にも欠点がありまして、気が短いことです。「なかようしいやー」、かあさんの声が聞こえてきます。

合　掌

http://butsuga.net/

平成17年5月22日
第二八四回　大倭会文化行事報告

山科の地に天智天皇陵と坂上田村麻呂公墓を訪ねる

杉本順一

　五月二二日起き掛けのテレビの音に緊張が走る。耳に入ってきた第一声は「タガジョウシノコウコウセイ……」（多賀城市の高校生……）。

　多賀城市と言えば今日私たちが訪れる予定の坂上田村麻呂公と縁深きところではないか。布団を飛び出してテレビに見入った。三人もの高校生が車に跳ねられて亡くなったとのことだ。

　私には気の重くなるニュースだ。

　多賀城市は多賀城跡がある土地なのだ。坂上田村麻呂が八〇一年征夷大将軍として東北エミシ原住民を大和政権（桓武天皇の側）に従わせるための拠点としたのが、この多賀城である。少し説明しておくと、「多賀城は多賀柵とも。陸奥国におかれた古代の城柵。仙台平野の北端。七二四年までに造営され、十世紀半ばまで存続。古代東北の政治・軍事の拠点となった。」（日本史広辞典、山川出版社より）

　彼の時代は、この地より以北の胆沢の地を制して蝦夷地を国領化し永続的な基地を築こうとしていた。

　ニュースに目覚めさせられた、このタイミングに法

▲天智天皇陵

▼坂上田村麻呂公墓

石田昌男さん写

主さんの言われていた「惟神(かんながら)の三要素」は「時・所・人」を思い出した。

私たちの今日の予定と何か関係が有るのだろうかと思いつつ、出発前に法主さんの奥津城にお参りする。二つの事は「ベツニアラズ　キヲイツニシテイル」と感じてくるものがある。

出かけの挨拶をすると「ミナ　トモニユク」とのことであった。

拝殿に上がり諸霊に挨拶をした。三年前約束した「故郷におつれする」アテルイ、モレの御両人(二人は東北原住の民の長として田村麻呂側に服し、和睦の意図をもって都に並従するも、後に河内国で斬られた)からも、朝のニュースについて「ワレラノ　ツラキオモイガ　コノカタチニナッタト　オモッテモライタイ」と言ってこられた。朝のニュースと文化行事の関係は、現界のことだけでは理解できない。裏(霊界)のしくみについて、分からぬままにあれこれ考えてしまう。

法主さんとともに文化行事に行くという有り難さの反面、今日の文化行事とテレビの事故の因縁を考えさせられて、ますます気が重くなってきた。運転してくれる中村俊哉氏にはこの件は言わずにおこうと決めた。聞かされたほうもいい気はしないだろうから。鈴月かあさんも「わたしは、いつも一緒」と言ってこられた。

小雨の中、天智天皇陵門前で参加員数の確認のため集合する。総勢三二名(子供三人)。

では御陵へ出発、石畳の長いなだらかな道をわいわいと御陵まで進む。おお、今年初めてのホトトギスがお出迎えだ。鶯も負けてはいない。

個々に挨拶する頃には雨もあがっていた。

天智天皇さんは「ミンナノ　スガスガシイ　キモチガ　ウレシク　ウツクシイ　ココロヲ　カンジテイマス」とのこと。

盛んに石垣の隙間を抜けて御陵に近づこうとする藤本翔大君(一歳)の姿に、大人たちも和んだ。

次の目的地に向かうため車に分乗。雨が急に激しくなってきた。車中ではお弁当をどこでいただこうか、気にしていた人も多かった。坂上田村麻呂公のお墓につくと、あの大雨が嘘のようにやんだ。グッドタイミングである。お蔭で墓前の広場で昼食をいただけそうだ。

公は鎧姿で立った形で墓に埋められたとの事なので、ご挨拶したらどんな事になるかと思っていたが、公の霊界での心境は意外にも(武人らしくないと言う意味で)「ミナノアンノンヲ　イノッテイルガ　ダレモワカッテイナイ」と言われたのだ。清水寺を建立された公の真意に触れた思いがした。

帰りの挨拶をしていたら「トモニ　ツレテイッテ　クダサレ」と言う。

私たちがアテルイ、モレ御両人を故郷・胆沢の地にお連れする事を知っているような言葉である。もちろん共に行く事を約束してお別れした。

こぼれずみ

千葉県船橋市　遠藤浩子

我が家は東京湾の東側、船橋港のへりに建っている集合住宅の6階で、毎朝3時頃になると、ポンポンポンポン……と漁船が東京湾に漁に出る音を、夢の中で聞く。

私は毎日、地域の学校へは通えない小　中学生15、6名と過ごしている。一緒に学習をしたり、スポーツをしたり、遊んだり。七夕では、短冊に書き表すことで自分の力を呼び起こせるように、祈りました。彼氏がほしい！　かわいくなりたい　もっと絵がうまくなりたい　水泳のタイムがあがりますように　〇〇高校に受かりたい　世界平和　家族が仲良く、等々。神さま、ヨロシク。

●東光大祭と祖霊祭ご案内●

日時　平成十七年八月十九日(金曜日)

＊午後一時二十分より
東方の碑　拝礼所にて

＊午後二時より
大倭大本宮拝殿にて東光大祭
奥津斎庭にて祖霊祭が行われます

東光大祭とは　昭和二十一年旧七月十五日、現大本宮の地に瑞祥の光が天に現れ、天の声「黎明は訪れたり東方の光　大法は立てり大倭太加天腹」が聞こえ、宗教活動の本宮が示されたのを記念する祭り。

祖霊祭とは　大倭にご縁の皆さん方のご先祖諸霊を始め、それぞれにご縁の御霊の鎮魂慰霊をするお祭りです。

なお、当日夕方六時ごろには東方の碑前にて、満月の出を待ちながら東方の瑞祥について考えたい。

また、夕方には有志の方が直会を用意されます。会費二千円。どなた様もご参加ください。

祭　弥栄おどりご案内　祭

日時　平成十七年八月二十七日(土曜日)
午後七時半より

場所　大倭紫陽花邑　西斎庭にて

今年も子供たちの夏休みの思い出の一頁に加えてあげてください。

寸莎

第65回

故森下　糸さん

菅原園勤務の頃

花を咲かせる

今回の「寸莎」では、今年の四月九日に九十四歳の天寿を全うされた森下糸さんに登場してもらおう。昭和六十二年に帰幽された夫の新藏さんとともに草創期の大倭を語る際に欠かすことができない方である。とは言っても、ご本人に直接インタビューできないので、主に五女の且田容子さんから伺ったお話しを基にまとめさせてもらった。

――森下糸さんは、明治四十三年十二月十九日に、現在の和歌山県田辺市で、六人兄弟の長女として生まれた。小学校三年の時に、漁師だった父親が亡くなって、母親が魚や野菜の行商をして家計を支えたので、糸さんは幼い弟や妹達の世話をしなければならなかった。「下の子を背に負うて学校へ行き、教室の窓の外から黒板を見て勉強した」と思い出を語っていたそうである。

十三歳の時、「口べらしのために大阪の家具屋に女中奉公に出て、料理や行儀などを習いつつ家にも仕送りした。よく働いたので、父とお見合いした時も、〝働き者だから〟と折り紙付きだったそうだ」と且田さんは語る。

一方の新藏さんは、足の骨膜炎のために龍神温泉で一年半も温泉治療をしていて、お見合いの時にまだ包帯を巻いていた。「その包帯を見て、可愛そうやなあと思ったのが運のつきだった」と糸さんは笑って話していたそうである。糸さんは十九歳、新藏さん二十四歳の時だった。

その頃に、新藏さんは大阪の大黒町でノレン分けしてもらって「粟おこし屋」を開店していた。新婚の二人は家業に精を出した。また、長女の久子さんを筆頭に次々に七人の子宝にも恵まれた。

法主様にはじめて出会ったのは、終戦後の昭和二十二年末のことだった。当時十九歳だった長女の久子さんが重い胃病を患って床についていて、森下夫妻は信貴山や生駒の神さんに願をかけたりしたが、病状は一向に改善されなかった。そんな時、糸さんの妹の山中繁子さんが街頭布教していた法主様と出会い、「この人だ」と感じて森下宅に招いた。

久子さんを一目見た法主様は、死期が近いのを直感して、「病人さんに死んだのちの霊界の話しを聞かせてあげたんです。（中略）はたの者が、ああ、もうアカンのやなと悟ったと思うんやね。（中略）久子さんも、心の中で霊の世界のいろんなことが浮かんだように見えていたんだと思うんです」（『おおやまと』昭和六十二年三月号から）と感じた。

そのあとすぐに久子さんは帰幽したのだが、この出来事を境に森下夫妻の法主様への深い信頼と傾倒は一生涯続くことになる。法主様との間には、語りつくせないほどのエピソードがあるのだが、残念ながらここでは紹介するスペースが足りない。

昭和三十年頃からは、大阪の住之江の駅前で次女の弘子さんとともに「むつみ」という飲食店を経営していたが、子育ても終り、昭和四十五年十一月には、ご夫妻が以前から熱望していたように、法主様の住む大倭に移住した。大倭では、翌年一月に邑内に創設された奈良県立菅原園の厨房に二人で勤務しはじめた。

大倭に移住する前から、新藏さんは大倭会館建設の世話役をしたり、「大倭申孝会」や「すさのお会」の会長を務めたりして多忙であったが、糸さんはそうした夫を舞台裏で地道に支え続けた。こうした両親について、且田さんは、「父は陽気で気前がいい人で、母は明るいけれど、地味でヘソクリ上手の人だった。とても仲のいい夫婦で、特に大倭のことになると、二人の呼吸はピッタリ合っていた」となつかしくふり返る。

昭和六十二年二月十六日に新藏さんに先立たれたあと、糸さんは娘の清子さん夫婦と同居していたが、平成十三年末からは大倭の長曽根寮で暮らしていて、大倭の行事にも穏やかな笑顔で参加していた。

且田さんに糸さんの趣味を聞くと、「編物はプロ並みで、若い時から家計を助けていたし、料理や花も好きだった」と答えてくれた。「両親が昔、和歌山から苗木を持ってきて育った八重垣園の前にある八重桜が、葬儀の日に咲いていたのが嬉しかった」とも語ってくれた。糸さんも大倭で見事に花を咲かせたのだとつくづくと感じた。

（聞き手＝岸田哲）

AWTC日誌

6月12日　禊会。縁故者がJR西日本福知山線事故に遭ったという話が出され、このことと個人がどう係わっていくかについてがテーマの一つでした。

夕方からは、昭和45年11月号『すさのお』の法主さんの「近づく暮れの随想」を読み、「どうなるか　私のあとの大倭」等を中心に勉強会。

6月14日　千葉市の角田ゆかりさんが3年振りに来邑

6月15日　大倭神宮月次祭。

6月16〜17日　東方の碑の所で「第2回あじさい祭り」（大倭あじさいを育てる会主催）が開かれました。参加者140人位。この日以降も見物人の姿がよく目につきました。

6月18日　FIWCの定例委員会で、元交流の家管理人の故飯河四郎さんを偲ぶ夕食会。

6月19日　第285回大倭会文化行事は国立国際美術館と大阪市立科学館へ参加者27人（内子供3人）。ゴッホ展は猛暑の中、入館者の長蛇の列で早めに来た一部の人以外はあきらめ（徳永光栄さんはゴッホ展だけで帰られた様子）、オムニマックス映画では巨大な昆虫の迫力に、いつも元気な伊藤綾香ちゃんが泣き出し、藤本天音ちゃんはけなげに「ああ、面白かった」。

6月20日　東京の永仮まゆりさんが来邑されました（前日は文化行事参加）。

6月21日　この日は青山日元さんが法主様に託され、大倭大本宮開山の第一歩を記された六十年目の記念日にあたります。

大倭出版局IT部の福井市の齋藤正宏さんのお父さんが帰幽されました。享年75歳

6月23日　大倭大本宮月次祭。

6月27日　携帯電話の中継アンテナを立てる工事が始まりました。8月15日までの予定。車が多いのでご注意下さい。

7月3日　10人位が参加して田んぼの草取りが行われました。途中から雨になりましたが、できるところまでと続けて結局やり終えました。

7月6日　大倭神宮月次祭。

夜、大倭会館で邑倭の会。

7月7日　この日、初蝉発見！

中村昇次さん73歳に。焼肉屋で青山元子さん　美子都ちゃん（焼けた肉を昇ちゃんの皿に入れお世話してくれた）、岸野春子　大西弘美さんで誕生会。

7月8日　東京の青年物理学者、木村敬さんが李章根さんを訪ね来邑、杉本順一さんと歓談。

7月9日　邑交会が奈良パークホテルで開かれました。

7月10日　禊会。谷口明美（舞鶴市）日高裕美子（福井県高浜町）渡辺裕子（宮津市）さんと、木戸口智郁さん（大阪市）が初参加。日本や世界の様々な悲惨なニュースをどう思ったらよいかという問いかけで、前月に続くテーマとなりました。

夕方からは「多色彩即調和」等について勉強会。

大倭安濃苑では

6月14日　富雄南小学校3年生12名が、自分達の住む地域を調べる学習の一環で紫陽花邑を見学。矢追美壽紀理事長から感想を聞かれると、「楽しんで見学できました！」そう。

（菅原園）

6月4日　奈良養護学校文化祭に出身者7名が参加して、懐かしい先生達に会ってきました。

（須加宮寮）

6月30日　お楽しみ外出で天保山ハーバービレッジ海遊館に。

（長曽根寮）

6月28日　イトーヨーカドー内のバイキング　レストランへ利用者　家族　職員8名がご招待を受けました。

7月1日　元XJAPANのTOSHIさんによるミニコンサート「詩旅（うたたび）」を楽しみました。

（八重垣園）

6月21日　俳句クラブ。「でで虫や友にもらいし紫陽花に」「緑陰や切り株に座し老二人」

7月9日　大正琴クラブが長曽根寮でミニコンサート。

ATMiC

＊月次祭（大倭神宮）

8月6日（土）　午後2時より大倭神宮にて。

＊大倭会主催第四一回禊会

8月7日（日）　午前9時より大倭大本宮境内の清掃神事として行います。

なお大倭墓地清掃を午前8時から行います。

＊大倭教立教開宣祭及び大倭神宮月次祭

8月15日（月）　午後2時より大倭神宮にて。

＊東光大祭及び祖霊祭

8月19日（金）　旧暦7月15日です。詳しくは6頁参照。

＊月次祭（大本宮）

8月23日（火）　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

＊弥栄おどり

8月27日（土）　午後7時30分より。6頁をご覧下さい。

第286回　大倭会文化行事予告

秋の一泊旅行のご案内

―若狭・丹後の神々を訪ねる―

皆さん、今から予定しておいてお誘い合わせてご参加ください。

日　時：平成17年10月30日（日）〜31日（月）

行き先：若狭・丹後方面

お泊り：湯村温泉　朝野家

兵庫県美方郡湯村温泉

電話 0796−92−1000

定　員：50名程度

費　用：3万円程度

世話人：湯浅芳郎　電話 0742−48−3389

お願いとよびかけ

法主様ご帰幽満10年を記念して大倭大本宮で計画しておられる法主様奥津城の整備造成に、何卒各人の分に応じご協力をお願いします。

大倭会会長　中西　正和

1．**奈良信用金庫 学園前支店**　普通+.+-1.4
口座名　大本宮特別整備基金
中西正和

2．**郵便振替口座**　++4++1-/,3.1
口座名　大倭奉賛会